

物産展をきっかけに常設店舗化された「まちなか観光物産館」

世田谷区用賀商店街では、物産販売イベントをきっかけに陸前高田市との連携を深め、1年後の平成21年には陸前高田市から毎朝取り寄せられる新鮮な海産物や農産物を販売する、まちなか観光物産館「田舎のごっつお」を商店街内の元駄菓子屋の店舗を借りて開店した。

取組にあたって陸前高田市側では物産協議会が設立され、商店街振興組合側ではまちづくり会社が起業されるなど、空き店舗を利用した新たな店舗の開設に留まらない、双方が今後の持続的な発展を目指す姿勢には学ぶところが多くある。

東京都世田谷区

総人口：831,265 (人)
世帯数：432,235 (世帯)
総面積：58.08 (km²)
人口密度：14312.4 (人/km²)
(平成22年3月1日現在)

世田谷区用賀商店街

東急田園都市線用賀駅の周辺に広がる、店舗数約240軒の商店街。
およそ10年前に鮮魚店が閉店してからは、商店街に新鮮な海産物を販売する店舗がなくなっていた。



背景ときっかけ

商店街の活性化を図ろうとしていた世田谷区用賀商店街振興組合では、第一弾の取組として地方の物産販売を構想、平成20年には物産展を開催した。物産展にはインターネット上で海産物の産地直送を行う「田舎のごっつお」を運営していた陸前高田地域振興(株)も参加していた。

その後、約10年前に鮮魚店が撤退しており地域住民のニーズが高い海産物を扱う店を設けることで商店街の持続的な活性化を目指す同振興組合と、販路の拡大を目指す陸前高田地域振興(株)の目指すところが一致したため、協議を重ねて、以前は駄菓子屋だった所に陸前高田産の海産物を販売する「田舎のごっつお」を開店することとなった。

取組内容

用賀商店街振興組合では「地域商店街活性化事業」として経済産業省と世田谷区より拠出された補助金を活用し、商店街内の元駄菓子屋の店舗を借用するとともに店舗の改装を行い、平成21年11月に海産物を中心に販売するまちなか観光物産館「田舎のごっつお」をオープンさせた。

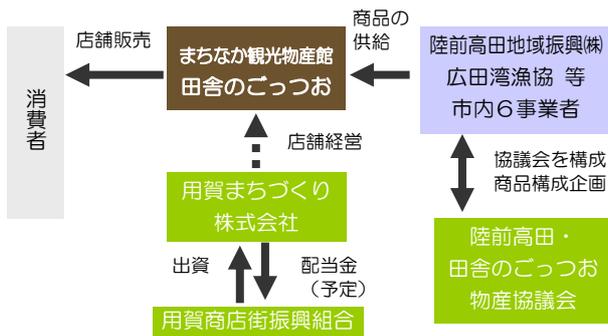
陸前高田市側では品揃えや地場産品の安定した供給体制を整えるために、陸前高田地域振興(株)のほか、広田湾漁港、酔仙酒造(株)、(株)八木澤商店、(有)コマツ商店、きのこの SATO 販売(株)の市内6事業者が「陸前高田・田舎のごっつお物産協議会」を設立して商品の卸しを担当している。

同店開店後の12月には、用賀商店街振興組合が全額出資して、外部から人材を登用、田舎のごっつおの運営を行う「用賀まちづくり株式会社」を設立した。株式会社化により店舗運営等の決定の迅速化を図るほか、今後も商店街に必要な店舗やサービスを提供していく予定。

- 名称：まちなか観光物産館 田舎のごっつお (平成21年11月開設)
- 所在地：東京都世田谷区用賀4-3-13
- 面積：約7.5坪
- 販売品：陸前高田市より直送されたカキ・ホタテ・アブリ等の海産物、乾物、野菜、果物、日本酒、ジュースなど(原則宅配便で毎日輸送)
- 販売方法：買取販売(田舎のごっつお物産協議会が商品の卸しを担当)
- 営業時間：午前10時から午後8時(休業日 年末年始)
- 販売員：スタッフ 常時3名(9人によるシフト制)



事業の仕組み



※設立時の店舗改装費および翌年3月までの家賃は、地域商店街活性化事業として経済産業省が3分の2、世田谷区が3分の7を助成している



取組効果

- 商店街内の店舗で毎朝運ばれてくる三陸産の新鮮な海産物や農産物が購入できるようになり、地元住民も喜んでいる。
- 商店街内の人通りが目に見えて増加、商店街に活気が生まれている。
- 開店初日に行ったイベントでは、開店時間前から約100人程の客が並び盛況ぶりだった。
- 陸前高田市にとっては、地場産品の新たな販売ルートを確認することができた。また、常設店舗のため地域のPR効果が出ている。



取組上の工夫

- まちづくり会社として店舗運営を商店街から独立させ、事業責任者にはコミュニティカフェ経営やイベント企画を手掛けた外部の有能な人材を登用するなど、運営に関わる決定事項の迅速化を図っている。
- 浮き玉やイカ釣りのランプ、漁網、大漁旗をインテリアに使用し、来店者に三陸の海を想起させることで、購買意欲を高めている。
- 地域の業者が物産協議会を結成しており、安定した品揃えや産直商品の供給体制を保っている。



今後の展望

- 安定的に利益が上がる店舗を目指し、商店街に配当金の支払いができるようにする。(平成24年度に年商3,600万円を目指している)
- 用賀まちづくり会社では、今後もコミュニティ機能など地区に欠けている店舗・サービスを補い、商店街のさらなる活性化を目指していく。
- 陸前高田市側としては、田舎のごっつおでの海産物や農産物販売をきっかけに、地域交流の推進につなげていきたいと考えている。

